

## 海の民俗伝承と祭祀儀礼 一船による神の来往と身体表現一

野村 伸一

(共同研究「アジア祭祀芸能の比較研究」グループ代表)

ここでは東シナ海とその周辺地域を考えている。この海域は稲作と漁撈の地。そこで育まれた生活感、社会生活の特質、神観念や他界観などは日本人の基層文化をなす。ところで、この地域にはそれを跡付けるための文字資料が非常に少なく、あっても断片的である。そのため多くは民俗世界における知見をもとに再構成することになる。

本日の主題「海の民俗伝承と祭祀儀礼一船による神の来往と身体表現一」もまた例外ではない。春秋戦国、呉越の時代から、東シナ海の各地には船の往来があった。しかし、その移動の詳細は知るすべもない。『史記』によると、徐福は多くの有用な者たちを伴い、山東半島から東南に向けて船出した。目指すは蓬莱山など、神仙の地である。そして徐福は幾度かの挫折ののち、ついに到着地の王となって戻らなかったという。徐福らの移民が事実か否かはともかく、二千年、三千年の移民の歴史を考えれば、その種のことはあったであろう。そして、こうした伝承とともに東シナ海地域には船の来往に特別な感情が伴うことになったとみられる。

ここで二つのことが考えられる。第一は到来する正体不明の船を畏怖し、同時にサチを期待すること、第二は海彼に神霊の地、他界があるとすることである。この二点に沿って民間伝承をみていくと、理解できることが多い。しかも、地域ごとに人びとが誠意を込め、工夫しつつ、それを表現してきたことも知られる。いくつか事例をあげる。

沖縄北部では各地で海神祭<sup>ウンジャミ</sup>がおこなわれる。ウンジャミはまた海彼からくる神の総称で、サチ、とくに稲作をもたらす。伊平屋島では海神は船に乗ってくる。そのさまが象徴的に表現される(図1)。この神は船に乗って帰るが、送りの船は表現されない。ただし、伊平屋島の伝承では、かつて喜界島のノロが島の東方で難破したが、それを救助し、歓待して送り返した。それが祭儀の起源だという。その見送りのさまが神役により表現される(図2)。この伝承は海神の来訪、帰還の上に語られたものであろう。ま



図1 沖縄県伊平屋島のウンジャミ(海神祭)  
海神は船に乗って訪れる。そのさまが神役により象徴的に表現される。



図2 神役による神送り(伊平屋島)  
海神は船に乗って帰る。しかし、送りの船そのものはみえない。



図3 沖縄県古宇利島のウンジャミ  
海神の移動を示す船漕ぎ。縄で船を模す。



図4 海神の見送り（古宇利島）  
神は東方塩屋湾に向かって去る。この種の表現は沖縄の各地でみられたものだろう。



図5 沖縄県伊良部島の海神願い（ヒダガンニガイ）  
漁家の女性たちは年に2回、浜辺に正座し、豚や酒を  
供え、ヒダガンに祈りを捧げる。

た、古宇利島でも、海神の移動（図3）、帰還を見送る様子が神役により表現される（図4）。

一方、沖縄には龍宮神がいて、これが直接、海とかかわる。宮古群島の伊良部島の漁民は、毎年2月と11月の2回、海神願い<sup>1</sup>をして航海安全と豊漁を祈願する。このときの海神はどのようにして到来するのかわからない。ただ、人びとは浜辺に正座し、豚や酒を供え、ひたすら祈りを捧げる（図5）。そこには各人の持参した膳が並ぶ。

この光景は朝鮮半島南部の渴祭<sup>ケッチェ</sup>を連想させる。渴祭でも膳が並ぶが、それは龍王のもとにいる水死者の霊への供物でもある。そして渴祭<sup>ケッチェ</sup>の最後には多く船流しが伴う。

東シナ海地域の人びとは、海の彼方の神の国には天然痘その他の疫神もいると信じたようである。朝鮮半島や済州島では天然痘の神は船に乗って往来すると信じられていた。この祭祀儀礼は今ではみられないが、祭儀に使われた舟形は保存されている（図6）。

済州島ではまた、龍王<sup>ヨワン</sup>やヨンドウン神、疫病神<sup>ヨンガム</sup>令監の神送りに模造の船が使われる。旧暦2月のヨンドウンクツでは、龍王<sup>ヨワン</sup>とヨンドウン神が迎えられ、海女たちは一年の海の豊饒と安全を祈願する。そして、これらの神や船王（<sup>ソナン</sup>ヨンガム）などを船に乗せ江南天子国に送り返す。また、令監<sup>ヨンガム</sup>は妖怪の一種で水辺を好む。済州島にはそのポンプリもあるが、これは朝鮮半島南部の漁村で一般にトッケビとして知られるものと同類である。トッケビはもてなせば、豊漁をもたらすが、対応を誤ると、病気その他災厄が生じる。令監<sup>ヨンガム</sup>を送るのは通常は小さな模造の船である（図7）。しかし、<sup>ウイド</sup>蝸島では水中孤魂と龍王への願いを込めて、立派な茅船<sup>テイベ</sup>を作り、送り出す（図8）。船の大小、模様は地域ごとに異なるが、根柢にある想いは同じである。数多の死者霊とそれを司る龍王への畏怖、災厄流し、そして、きたる年の豊漁、豊饒祈願である。

福建や台湾で流される王爺の船（王船）も本質的には同じである。元来は瘟疫<sup>はやりやまい</sup>追却の儀礼

に用いた模造船で、祭儀後に流すものである。これが海を漂い陸地に到ると、神聖視される。その船に靈験があれば、大きな王爺廟となる。そして、三年に一度、盛大な迎え（図9）、送りの儀礼が催される（図10）（図11）。

東シナ海地域には、さまざまな船の来往があった。仏教の般若船（図12）、日本の精霊船しょうろうぶねも同じ脈絡の上にある。これらを伝えてきたのは、各地の巫覡、僧、道士、漁民、とりわけ婦人たちである。その行儀の根柢には水死者への恐れがあるが、さらに遡れば海域を往来した者たちへの記憶に行き着くだろう。東シナ海に共通する、こうした心意と儀礼は再認識されるべきである。この海域の基層文化は明らかに一連のものである。ただし、物とところは同一であっても、身体表現は各地で異なる。そのひとつひとつこそが個々の地域の特性ということになる。



図6 夫人拝送（マヌラベソン）の祭儀で使われていた舟形（済州民俗博物館所蔵）  
天然痘の神は船に乗って往来する。竹籠だが、一種の船。



図7 韓国済州市のチルモリ堂ヨンドゥンクツ末尾  
済州島では龍王やヨンドゥン神、疫病神・令監の神送りに模造船が使われる。これはヨンガムたちを送る船。



図8 韓国全羅北道蝸島の茅船  
蝸島大里では水中孤魂慰撫、龍王への願いを込めて、大きな茅船を作る。これにホスアビ（案山子）を載せ、海上に送り出す。



図9 台湾小琉球の王爺醮

王爺は天（玉皇）の使いとして各地域を見回る〔代天巡狩〕。王爺を載せた船（王船）は地域を巡回し、豊漁、地域の平安を約束する。王船は神輿の代わり。



図10 台湾台南県蘇厝の王爺醮

王爺には童乩がつきもの。彼らは王爺の意向を代弁し、各種の託宣をする。また武器で身体を打ち、針を頬に刺したりもする。



図11 台南県蘇厝の王船送り

近年は王船が大規模化し、こうした木造船が焼却される。来訪した王爺は煙とともに天に帰る。



図12 寺院の壁画にみられる般若船（韓国全羅南道長興郡宝林寺）

引路王菩薩（右端）が死者霊の浄土入りを先導する。

註

1—ヒダガンは浜（ヒダ）神（ガン）の意味だが、龍宮神（リュウキュウヌカン）と同じである（比嘉康雄『神々

の古層⑩ 海の神への願い〔竜宮ニガイ・宮古島〕、ニライ社、1992年、47頁）。つまりは海の神である。